

東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第14回 後編

◎支えている人 / 話し手：廣川 和紀 さん

一般社団法人プレーワーカーズ 理事/事務局長

16歳の頃に子どもに関わるボランティアを始める。大学卒業後、遊具・保育教材のメーカーで勤務するかたわら、プレーパークの活動を行った。東日本大震災後、職業プレイワーカーとしての道を歩み始め、仲間と共に一般社団法人プレーワーカーズを設立。



こどもの変化について

こどもの変化については難しいですね。震災があったからなのか、単純に時代の変化なのか、いろんなことがあるので一概に言えないと思います。でも震災直後から2014、15年ぐらいまでは、殴る、蹴るは多かったなと思います。あれはなんだったんだろうと今でも思いますが、ストレスを昇華するためにその行為によって発散しているんだということは考えていました。なので、それはだめだという話ではなく、受け止める人が必要だと思っていて、とはいえたゞやられっぱなしでも辛いので、多少やり返しながらか対峙していました。

ある活動で出会った大学生とは、能登の話をきっかけにいろんな話をしています。彼が言っていたのは、10年ぐらい全然整理がつかないまま、踏み固めないで、積み重なっちゃってるって言ってたんですよ。いやなことがあったり、いいことがあったり、いろんな感情がその瞬間はあるけど、そのうちにちゃんと踏み固めて、ああいうことがあったけれど今はそれを土台にして次のステップを踏もうと、その感情を踏み固めて、経験になっているんだと思います。しかし、彼の言葉では、震災のことに関しては踏み固まらないまま、ふわっとしたまま、そのまま残っているという話でした。10年経って、今、蓋を開けて向き合おうとしているのか、ちょっと辛いんですよ、みたいなことを話していました。震災後5年くらいまでに出会った小学生たちとの付き合いを思い返すと、話してくれたことは聞くというスタンスは当然取っていたけれど、こっちからは被災について聞き出すことはせず、とにかくあそぼうよ、というスタイルでやっていました。今、震災から時を経て、当時は出会っていなかったけど、震災当時小学生年代だった子とも話すことがあります。彼らとは、今の

自分たちの信頼関係の中で、当時の被災状況など深いところまで対話することがあります。あらためて自分も、まだまだわからないことがいっぱいあるなど聞いています。

また、これは震災に関係ないかもしれませんが、私たちはあれをしなさい、これをしなさいとは全然言わず、環境がある中でこどもが選び取っていくものだと思っているので、自分たちはとにかく環境を用意して、お好きにどうぞという形でやっています。震災直後の子どもたちは、最初こそ、やっていいの？という感じはありつつ、しかしスイッチが入った瞬間に、むさぼるようにというのか、もうどんどんエスカレートするというのか、あそびたい、という感じがあったことを記憶しています。ただ、いまは環境があってもあそばない、と言うのでしょうか。今までは、あそびが始まらない子も、隣であそびを見せるとだいたい興味を持って、真似してやってみようとなっていたのですが、今は隣で何かをやっているけどあまり興味を示さなくなっています。やってみる？と聞いても、あ、いいですと。小学生というより若者のほうがそういう傾向があるかなと感じています。失敗したくない気持ちが強いんだらうなというのはすごく感じていて、それが震災の影響があるのかないかまではわかりませんが、最近を感じているのはそんなことです。その原因になるのかはわかりませんが、あそんでいないまま大人になってしまった人が増えすぎてるんだらうと思っています。大人にあそび心がなさすぎて、大人自身があんまり自由じゃない感じがします。こどももその中にいたらあそべない、そういうスパイラルの中にいて、抜け出せてる感覚があんまりないです。正直に言うとなりと負け戦感がある中で戦っているなって言う感じはあって、何をしたらいいんだかよくわからないですが、そういう中で苦しんでいるこどもや若者たちがいっぱいいて、対処療法的にいろんな居場所や支援が必要になっている、その大切さはとてもよくわかるし、必要だらうと思います。現在は、行政も居場所やプレーパークを作ろうといういろんなことをしようと動き始めていて、プレーパークという言葉がこども家庭庁の文言に入っていて、行政にも伝わるようになってきたので、これから一般化してきて、広がっていくんだらうなと思います。しかし、それは理想とは逆で、一般化することで、そこに囲ってしまうことにもなると思っています。とはいえ、この先の20年、さらにその先の未来をどういう風に見たらいいかまではわからないですが、一旦その段階を経ないと次に行かないのかなと思いつつ、いま自分は目の前のことをやっているという状況だと思っています。

震災後の区切りについて

仙台に深沼海水浴場というところがあるのですが、そこが今年、震災後初オープンだったんです。いわゆるハード的な復興っていうのも、今やとなのかな、みたいな感じですかね。気仙沼にある大島という島には昔はロープウェイみたいなのがあったそうですが、その工事がこれから始まるらしいです。いわゆる復旧、元に戻す工事がこれから始まるって言うところなので、気仙沼の街並みとかを見ても、港がきれいになって、大島に橋がかかって、道路ができて、町が新しくなって、さらに観光地みたいなどの復旧、というのが今なの

で、15 年ぐらいかかるんじゃないですかね。そういう中で、心の復興というか、そういうところは、わかんないですよ。本当に人それぞれなので…私にはなんとも言えないです。まだ始まってない人もいるんだろうし、大変な時期はもうとっくに過ぎているから、もう全然普通です、という人もいるとは思いますが、一概に言えないなと思います。自分も含めてですけど、日々の暮らしでそんなに辛い思いを振り返らなくてもいいような生活している人もいるとは思いますが。そういう意味では、普通に暮らしているからこそ、そうじゃない人もあるということに、あらためて気を付けなきゃいけないんだろうなと思います。

なぜあそびなのか、原体験から

私は、生まれ育ちは東京の中野区で、地域に少年団という活動があったんです。たぶん 1960～70 年代に、こども劇場、親子劇場などのこどもの文化活動、そしてプレーパークも生まれていると思うんですけど、そういった活動が中野区でもあって、自分の親の世代くらいの人たちが活動を始めていたそうです。こどもの自治を育てる少年団活動、と言った感じでした。PTA のこども会みたいに保護者がプログラム組んでやるのではなく、高校生や大学生が企画をして小中学生が集まってあそんで、という活動でした。月に一回の行事をやったり、年に一回長野にキャンプに行ったりしていたというのが自分の原体験でした。森の中で自由に自然と一緒にあそぶって東京の日常じゃできなかったりする中で、火をおこしたり、森の中で何か食べたり、少年団の活動はすごく好きだったんですよ。自分が通っていた幼稚園もすごく自由でした。長野にみんなで行って、森であそんだり畑の野菜を採ってみんなで調理して食べたり、ということもしていました。そういうことが好きなお父さんお母さんたちが少年団のグループも作っていたので、名前はプレーパークでも森のようちえんでもないですが、それに近いような活動の中にはどっぴりいました。高校ではサッカー部に所属していたので離れていた時期もあるんですけど、高校生の時に、やっぱりそういった活動が楽しいなって思うようになってから、こどものあそびの環境のことを少しずつ考え始めました。そして大学を選ぶ時は、スポーツとこどもとあそびをもうちょっと考えたいと思い進学しました。進学後、知り合いにプレーパークっていうのがあるんだって紹介してもらい、東京のプレーパークに関わるようになっていきました。最初は、こんな都会の真ん中で毎日キャンプやってる、すごい、という印象でした。めちゃくちゃ理想、こういうことがしたい、おもしろいなと思いましたね。その当時、東京の日常にそういう森のあそびはなくて、虫をとったこともなかったです。仙台に来て思いましたが、仙台が地元の同世代の大人のほうがよっぽど山とか田んぼであそんでいます。私は全然知らないことばかりですが、プレーパークに行くようになってあそび直していく中ではまっていますね。そこからは、考えれば考えるほどあそびだよなって思っています。サッカーのコーチとして小中学生に教えることもしていたんですけど、結局本人がやりたいって思うからやれるとか、うまくてもへたでもいいじゃんとか、一生楽しんでサッカーできたらいいよねとか、いろんなこと考えていくと、やっぱりあそぶってことに行き着きます。そういう意味では、必ずしも自然

の中や屋外じゃなくても、部屋の中でも赤ちゃんはあそぶし、それはそれで大事だと思うんだけど、やっぱり外のほうが、いろんな魅力がたくさんあって、変化もあって楽しいよねと思います。本能的にもやっぱり外に行くと思うし、自分も外にいるのが大好きなのもあるので、プレーパークとかにはまったんでしょう。なので仙台に引っ越してきた時はプレーパークを目指して行って、そこで知り合い作って段々友達ができて、コミュニティを作る場でもあって、若者だった自分にとってもすごく貴重な場所でした。

原動力

原動力は、なんでしょうね。でも、正反対の想いを両輪にしているかもしれません。負け戦かなと思いつつ、未来のことはわからなくて、着実に進んでいる感もあります。行政がこちらを向いてくれたこと、いろんな仲間ができてきたこと、プレーパークの活動自体も増えてきたこと。それから震災前は、プレーパークはプレーパークの人だけでやって、児童館の人は児童館の人だけ、保育の人は保育の人だけという風に、それぞれの世界がありましたが、みんな共通のことと思っているんだから、そこはつないでもいいよねという気持ちはずっと持っていました。それが2014、15年くらいの時期から、つながり始めてきたなって思っています。ネットワークみたいな輪が、今もじわじわ広がっているの、そこは自分にとっても、やりがいというか、楽しいところです。そして、宮城だけじゃなくて、今は岩手や福島など、いろんなところにも同じ想いを抱いている人が増えてきていて、そういう人とつながりながらやれているので、広がってきているな、という感じはすごくあります。全体をみるとまだまだ負け戦で勝てないのかもしれないけど、仲間が増えていることはすごく感じています。

これからのこと

直接こどもと関わったり一緒にあそんだりということも好きですが、それと同時にこどもがあそべるように環境を整えていきたいとも思っています。地域でこどものことを支える大人がいる社会が理想だと思っていて、自分ができることは、そのフォロワーみたいなポジションなんだろうと考えています。おそらく性格的にもこれまでやってきたこともそうなんですが、地域でこどもを支える人を支える人、くらいのポジションです。お金のこと、運営のこと、現場の関わり方のこと、いろんなことをオールマイティに支援できるような人になりたいと思っているので、いろんな形でプレーパークやプレーワークの講座を開催して、大人に伝えたり発信したりしています。また、一般社団法人プレーワーカーズでは事務局長という立場でもあるので、関わるプレーパークやあそび場の運営全般をみていくということはやりたいと思っています。プレーワーカーズとしては、究極は、プレーパークがなくても、こどもたちが自由に地域の中でのびのびあそべる社会になればいいなということ、を、常々思っています。一方で、プレーパークを作れば作るほど、あそびたいんだったらプレーパーク行ってきなさいという感じになってしまっていますが、聖域にしたいわけじゃない

んです。とは言っても、やはり今は場がないとどうにもならないこともあるので、まずは、プレーパークを宮城県に 114 か所作ることを目標にしています。こどもが自分の足で歩いて行ける場所に最低ひとつはプレーパークがある状況がいいんだろうと考えた時に、宮城県で小学生の人口 1000 人あたりに一か所、さらには市町村に 1 個以上常設の場所があり、地域の人がやっている定期開催の場があって、ということを単純に計算して、数字を足していったから 114 になったので、とりあえずこの数字を目標にしています。震災前は、宮城県全体でプレーパークは 4 か所しかありませんでした。しかし、震災で増えて、でも、なかなか続けられないなどいろいろな理由で落ちてしまいました。そして、今また、宮城県や仙台市などの行政や市民も少しずつ増えてきて、いま数えられているだけで 28 か所ぐらいの活動があります。全然まだまだではありますが、少しずつ増えている、広がっている気はします。一旦は広げていくっていうことを目標にしつつ、広げるとどうしても薄まるので、ちゃんと深めるということと、同時にやりたいなと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・

◎廣川和紀さんにお話を伺って

酒井真由子

待ち合わせ場所で廣川さんを待っていると、廣川さんはホンダの「CB125R」という原付 2 種のバイクに乗って、ものすごい笑顔で現れました。原付 2 種のバイクは高速道路を走れないそうで、仙台から石巻まで 50 キロの道のりを、廣川さんは下道で 2 時間かけてきたとのこと。ちなみに自動車で高速道路を使うと 1 時間程です。廣川さんにとって、愛車に乗って下道でやってきたこの日は特別というわけではなく、これが廣川さんの日常のようです。

廣川さんは優しい笑顔を私たちに向けて話をしてくれましたが、廣川さんの言葉はとても力強いものでした。特に、廣川さんが、「緊急時にこそあそびは必要」で、「こどもにとってあそぶことは命に直結する」と話してくれた時、私はこれまでのあそびに対する考えが甘かったことを痛切に感じました。私は、子どもの学びや成長を促すうえで遊びは重要だと考えていましたが、それだけではなく、人が生きていく上でもあそびは大切なものだという認識も持っていました。けれど、あそびを「命」と結び付けるまでには至っていませんでした。

廣川さんの言葉「寝ないと死んでしまう、食べないと死んでしまう、というのと一緒に、こどもはあそばないと心がなくなっていって死んじゃうんだろうな」という意味で、やっぱり命と一緒に、「本当に本当にその通りだ。あそびは絶対的に必要なんだ」と、あそびに対する見方が一変しました。

廣川さんは活動を続ける中で、「震災によってあそびやあそび場が失われたのではなく、本当は震災前からあそべていなかった」ことがわかってきたそうです。そうして、こどもが

日常的にあそべることを目指しておられます。

こどもがあそべるように、おとなたちは、まず、環境を整えることが多いと思います。けれど、廣川さんは、ハード面を整えるだけでは足りないと言っておられます。確かに、私が暮らす地域にも、子ども不在の公園がいくつかあります。おとなが遊具や場所を整えるだけではだめなのです。廣川さんのお話から、こどもの日常的なあそびを保证するには、お互いに名前を呼び合って関係性を築くこと、地域の人が地域の子どもの顔を思い浮かべ、こどもたちのために考えていくことが必要であることがわかりました。

廣川さんはご自身のこれからについて、地域の人たちと一緒に考えていくような『子どもを支える人』を支える人になりたい、お金や運営、関わり方など「いろんなことをオールマイティに支援できる人」になりたいと考えておられました。現代社会においては総合的に見たり関わったりするのではなく、自身の専門性に特化したり、一部分だけを見ることが多いような気がします。けれど、廣川さんは一つに特化することなく、総合的な視点で物事を見ている、一つ一つを結びつけて全体を支えようとしてる、今の社会に最も必要なことではないか、と思いました。

私は最後に、廣川さんに「廣川さんは『負け戦感がある中で戦っているなって言う感じはあって、何をしたらいいんだかよくわからないですが』とおっしゃっていたけど、それでもなお、こうして続けられるのはなぜなのですか」と尋ねてみました。すると、廣川さんは、「負け戦かな」と思いつつも、仲間が増え、プレーパークの活動も増えてきて「着実に進んでいる感もある」と笑顔で応えてくれました。

優しい満面の笑みを絶やさない廣川さんは、高速道路こそ乗れませんが、小回りが利き、どこにでも入っていける愛車で、時間をかけてやってきました。これが廣川さんのスタイルであり、「負け戦」だとしても「着実に進んでいく」ためのしなやかさの秘訣なのかもしれないと思いました。

聞き手 小林成親、酒井真由子

まとめ 酒井真由子

編集 清水冬音